



# 多彩な人材・多様な農村生活



昆田さん自慢の作業場



果樹園に立つ麻田さん



傾斜地に建つ塚本邸



珈琲考房と武山さん

農村部における過疎、高齢化進行の一方で、高齢年齢層の都市部から農村部への還流が新たな動きとして着目されています。開放的な北海道の農山漁村はその豊かな自然環境と比較的整った生活基盤とあいまって、移住希望の多い地域となっています。本シリーズでは、北海道を事例として、移住・長期滞在・二地域居住の地域社会に与える影響と今後の方向性を探ります。

ともに、畑の手入れなどをして過ごすことが多くなった。家の周りには、リスなどの小動物や野鳥もやってくる。周辺農家等とつながる地域コミュニティにも積極的に関わっている。丘の魅力にひかれた新住民、塚本さんは、一家で農村の環境を存分に満喫している。

### 無理をしない高齢者農業

マイイ一六区に隣接した農業地帯に「あさだ農園」はある。その入り口付近に行者コテージなどの野菜が少し植えてあるほかは、大部分がベリー類などの果樹園になっている。「農業を使っているだけで、虫が多い、鳥や虫に食われても、それを上回る生産量があればいいんだ」という農園の主人麻田信一さん(59歳)の考え方を体現している。

麻田さんは、今年3月まで北海道副知事の要職にあった。農学部を卒業後、長く農政に携わってきた麻田さんには、退職後は自分の理想の農業をやりたいという思いがあった。しかし、畑作は耕しては植えるという大変な作業を毎年伴うので、リタイア後に始めるのは、かなりつらい。これに比較して、果樹栽培は植えてしまえば維持管理するだけなので、高齢になっても可能だ。そんなわけで果樹園を造成したが、若い人たちが都会のサラリーマンにも自然や農業の魅力を知ってもらいたいとの思いから、収穫などの体験もできるようにした。

麻田さんが現在地に移住した理由として、「長沼町は、国・道・市町村が協同で都市と農村の交流を推進する『ニュー・カントリー事業』の指定第一号で、外部の人たちを受け入れる準備を備えている。マイイ丘陵からの景観が素晴らしい。札幌まで1時間でアクセスできることを挙げている。『農村の生活だけでは煮詰まってしまう』、たまには都市の魅力も楽しみたい。そんなライフスタイル

### 北海道夕張郡長沼町マイイ一六区

札幌の中心から車で小1時間の長沼町は水田を中心とした典型的な空知の農村である。その長沼町の東に広がる丘陵部のマイイ一六区と呼ばれる地区に、洒落た住宅群が、林間に見え隠れしている。50戸にも及ぶ住民たちのほとんどが、都会からこの地に移り住んだ移住者か週末をここで過ごす都会人たちだ。

その一六区の入りにある、珈琲考房(株)・シボルトは、札幌からわざわざ「T.T.T」を飲みに来る客があるほどの人気店。昼下がりに近所の農家の奥さんや新規移住者たちの溜まり場ともなっている。マイイへの移住希望者の多くが訪れたこの店の店主は、千葉県出身の武山敬二さん(47歳)。実は、武山さん自身も、そんな移住者の一人である。1989年に600坪の土地を取得し、90年に札幌から家族とともに引っ越してきた。以来、この地で「T.T.T」を焙煎して札幌市内など一四店で販売することも、喫茶店を営んでいる。

### 風景の見える「T.T.T」を

武山さんは学生時代を札幌で過ごした。喫茶店でアルバイトをしていたものの「T.T.T」は好きではなかったが、札幌の「T.T.T」焙煎家襟立稔規さんとの出会いがその後の人生を決めた。日本の焙煎「T.T.T」界の伝説の巨人といわれる人の「長男である。武山さんは稔規さんのいれた「T.T.T」を飲んで感動し、「T.T.T」職人の道をたどり始める。弟子を取らない襟立氏に、毎日、自ら煎った豆を届ける。そんな生活が一年以上続くうちに、「T.T.T」の味がみえてきた。遂には、襟立さんから最初で最後の弟子と認められるまでに至り、師の後援もあって、札幌市内に小さな珈琲店を開く。商売は順調に拡大するが、5坪の店はいかに狭い。また、札幌のような大都市では、豆を煎る音も近

ルが自分らしいと思っていた」という。  
**オートキャンプが縁で**

マイイの丘を下りていくと、長沼町の市街地寄りに、世界的な写真家昆田亨さん(75歳)の自宅とアトリエが立ち並び一角がある。  
昆田さんは、ネパールでの日本結核撲滅医療チームを追った「カトマンズの谷間」で第3回太陽賞を受賞しているほか、写真嫌いで有名であった「アノの巨匠、故スワトスワフ・リヒテルが唯一信頼し、自らの写真集の出版を許可した写真家として知られている。

そんな昆田さんとマイイとの出会いは、オートキャンプが縁だ。日本におけるオートキャンプの先駆者の一人であった昆田さんは、1993年に函館で開催された講演会に招待され、講演をした。昆田さんは、取材のため、家族でキャンプカーに乗り込み、ヨーロッパ中のオートキャンプ場を泊まり歩いていたのだ。

たまたま講演を聴いた長沼町の職員が、当時町が計画していた「マイイ・オートランド」(1988年開業)についてアドバイスをほしいと、昆田さんの来訪を要請した。何度か来訪しているうちに、今度は町が設置したアトリエハウスを使ってほしいと懇願される。こうして、95年には湘南に自宅とアトリエを残したまま長沼町のアトリエハウスに移り住み、97年には現住地に1万2千坪の土地を購入し、その2年後にはログハウスを建て、有明子夫人、長男でグラフィックデザイナーの双樹さんとともに、湘南の自宅を引き払って移り住んだ。  
昆田家の車庫には、34年前にヨーロッパで買った愛車フォルクスワーゲンの「バスとシート」の2CVなどが並んでいる。さらに、草を刈るためのトラクターや道路除雪用の大型除雪機まである。機械好きの昆田さんにとって、これらの機械

隣住民にとっては騒音である。人をくつろがせ幸せな気持ちを提供しようとする者が、近隣の人々に迷惑を掛け続けるような真似はできない。武山さんは焙煎にふさわしい場所を探し始めた。そんなとき、たまたま訪れたマイイの丘の景観・環境は、武山さんの理想にピッタリであった。

以来、15年、斬新な珈琲考房の建物も、武山さんの煎った「T.T.T」の味も、すっかりマイイの丘の景観になじんでいるように思える。「味には風景がある」とはジャック・ルイ・ゼム・味覚研究所所長の言葉であるが、武山さんの「T.T.T」からは、マイイの風景が見えてくるようだ。  
**アイバンよりルラルを**

最近、マイイ一六区に一家で移り住んできた塚本さん(35歳)は、毎日、片道40分の自動車で札幌市内のコンサルタント会社に通勤するサラリーマンである。

塚本さんは、富山県高岡市生まれ、学生時代に北海道の自然に触れ、北海道の会社に就職を決めた。造園・景観・街づくりなどが塚本さんの仕事であるが、仕事の合間に長沼町内の数軒の窯元を訪れた際、自然が豊かで地価も手ごろなマイイの土地と出会った。1998年のことであった。夫と初めて土地を見に来たときに丘から眺めた夜景の美しさも移住を決める動機のひとつだった。家の完成は昨年。傾斜地を活かし、壁面を木材で覆い、敷地内の林の風景と調和させている。住宅を道路から40mほど離れたのも、除雪の苦労より景観的な配慮を優先させた結果だった。また、塚本さんは、あえて通勤に不便な場所を選んだ理由を、「自分たちが、アイバンよりルラルを強く意識し始めた世代だ」と説明している。

マイイに移り住んでからは、早く家に帰りたいという気持ちが強くなったという。週末も家族と

の整備や工作で、どんなに騒音を出しても迷惑がかからない。札幌の大型DIY店にも1時間で行くことができるマイイが、たまたま魅力的だった。  
**マイイ田園学校構想**

長沼町では、このような多彩な新住民と元々長沼に居住していた農業者等の知識経験を、新旧の住民や田園生活を希望する人々に伝授する「マイイ田園学校(仮称)構想を進めている。

町長の板谷利雄さんは、2年前にカントリーホーム構想欧州視察の団長としてフランスの農村を訪れ、アフラット(フランス農村活動人材養成協会)と出会う。アフラットは、今から30年以上前に、過疎に悩むフランスの農村地域に暮らす若い農業者たちが立ち上げ、大きな成功を収めた教育機関である。町長は直感的に、いま長沼町に求められているのはこれだと思った。

前述のとおり、長沼町は数多くの都会人たちに居住の場を提供してきた。また、ここ数年間に100軒以上の農家が農家民宿の許可を受け、都会から多くの中高生と一般客を受け入れている。しかし、短時日のうちに、都会に住む人たちが農村を知り、農業に理解を持つことはできない。そこで、町内にあるホテルや民宿に、ある程度長期に滞在していただき、長沼に暮らしている多彩な住民たちとの交流を通じて、農村移住や農村起業のステップにしてほしいというのがマイイ田園学校の狙いである。

### レポーター

小俣 寛

(財)北海道地域総合振興機構主任研究員)